

『おもろさうし』に謡われた地名：プロット地図を資料として(国際日本学インスティテュート, 修士論文要旨(2005年度修了者))

山城, 洋子

(出版者 / Publisher)

法政大学大学院

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

大学院紀要 = Bulletin of graduate studies

(巻 / Volume)

56

(開始ページ / Start Page)

268

(終了ページ / End Page)

268

(発行年 / Year)

2006-03-31

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00020732>

『おもろさうし』に謡われた地名
—プロット地図を資料として—

山城 洋子

『おもろさうし』の従来の研究は、ほとんどが言語学的な解釈に多くの年月が費やされた。1972年に岩波本『おもろさうし』が出版され、研究の裾野が広がったとされる。しかし、地名に関しては「地方おもろ」に関する以外は見つけることができなかった。今回の地名抽出は2000年に出版された外間守善校注『おもろさうし』をテキストに、尚家本『おもろさうし』を参考にした。1554首中、地名が明記されているのが975首で、62.7パーセントを占める。この過剰な程の地名の頻出は何を意味するのか、各巻ごとの地名を抽出し、地図上にプロットすることで古琉球王国時代の人々生活が浮かび上がるのではないかと考えた。

オモロは、各地の部落や間切単位の祭祀から王府の祭祀まで謡われ、土地をほめ、領主的人物をたたえ、豊穡を願い、航海の安全を祈っている。歴史上の人物を讃美し、かつて経験した戦闘を謡っている。そこには、古琉球人の精神生活を見ることができるとともに、抒情詩や叙事詩、または物語歌謡の萌芽を見ることができる祭祀歌謡であるといわれている。

22枚のプロット地図でまず明らかになったことは、沖縄本島の全間切からオモロが採集されていることである。王府の編纂目的がはっきり読みとれる。それとともに、268の地名が謡われていることにより、当時の人々のシマ(村落)への密着性もわかった。シマというマイクロコスモスには、祈りの場の御嶽があり、祈る人の神女がいて、村役人の按司がいる。人々はシマで生まれ、成長し、シマの人と結婚し、生活を営み次の世代を育てていく。そして、シマの人に見送られてあの世へと旅立っていく。それがおもろ時代の人々にとって一番幸せな生き方だった。

では、まったく閉鎖された社会かというところではなく、第4章でとりあげた「船とのおもろ御さうし」のように、日本、中国、東南アジアとの交流は活発になされている。万国津梁の鐘はその象徴である。今回は琉球王国の領域のみをプロットしたが、地名頻度では大和20回、筑紫12回、唐10回、鎌倉6回、京6回とかなりの頻度で出てくる。東南アジアの国々も、交趾3回、南蛮3回、交刺巴1回等、交流の深さが謡われている。

73番のオモロには次のように、那覇港の国際港としての殷賑が窺える。

首里おわるてだこが／浮島はげらへて／唐南蛮寄り合う那覇泊／
又ぐすくおわるてだこが(首里に、ぐすくにまします国王様が
那覇の港をお造りになって、唐、南蛮の船が寄り集まる那覇港よ)

王国領域外のプロットも試みたが、煩雑になり收拾がつかなくなったので、巻3、巻13のみに限定した。今後の課題としたい。

戦中期の日本語教育政策におけるある日本語教育者の理念
—長沼直兄の日本語教育に関する歴史的考察—

久保田 真樹子

長沼直兄(1898-1973)は戦前と戦後を結ぶ日本語教育の中心人物である。1922年に文部省の語学顧問として来日したイギリスのハロルド・パーマー(1877-1949)の英語教授法を日本語教育に採用し、独自の教授法を開発。『標準日本語讀本』7巻など作成された数多くの教材は現在の日本語教育の基礎となっている。本研究は、戦前から戦中へと激変する時代背景の中、長沼の教育理念がどのように形成されたかを検証し、その理念を明らかにする。

従来外地での日本語教育は皇民化教育の一環として捉えられ、それは植民地での「国語」教育として、また、大東亜共栄圏の「共通語」普及として主にイデオロギーを論点とした研究が成されてきた。

しかしながら、戦中期の長沼の日本語教育は、国策としての日本語政策の枠内ではあったが、その教授法は、国語でもなく、東亜共通語でもない、外国語としての日本語教育理念を貫いていたのである。これまでの長沼の業績は日本語教授法そのものを評価されてきたが、戦中期の制約の中にありながら貫かれたその教育理念を表出し、これまで知られなかったもう一つの日本語教育の姿に光りをあてることが本研究の目的である。

本研究は四章からなる。第一章「序論」に続き、第二章「長沼直兄の生い立ちと理念形成」、第三章「長沼直兄・教育者の理念」、第四章「結論」である。

第二章では長沼の教育理念がどのように形成されていったのか、時代を追って分析していく。まず、言語学者、ハロルド・パーマーと出会い、その教授法を体得していった米国大使館時代を「理念形成期」と位置付け、パーマーとの信頼関係、その理論を受容した過程を考察する。その後戦中期に入り、国策として日本語教育政策を行った日本語教育振興会で教科書編纂等を手掛けた長沼だが、当時の日本語教育政策を歴史的に概観し、さらに長沼の教科書編纂の経緯を時代とともに検証する。

第三章では、長沼の教育者としての理念を浮き彫りにする。前章で整理した理念形成期のパーマーの影響や日本語教育振興会当時の時代背景を踏まえて、長沼の編纂した教科書や当時の論文等を分析し、その理念を5つに集約して考察した。すなわち、1. 手段・道具としての日本語教育 2. 外国語としての日本語教育(母語への配慮) 3. 学習者尊重 4. 音声重視 5. 日本語の簡易化 である。これらの基本理念を詳細に検証しつつ、当時の大東亜共栄圏の共通語としての日本語教育政策との比較を行うことで、その相違が明らかになるであろう。さらに、日本精神の詰め込みを批判し、制約の範囲内ではあるが、最大限の抵抗を見せた、これまで取り上げられなかったことのない長沼の反骨精神を評価する。

植民地での日本語教育は、大東亜共栄圏の共通語を目指すという時代の潮流の中に位置付けられている。しかしながら、その枠内で言語習得理論に基づき、学習者中心の、外国語としての日本語教育に腐心した長沼の教育理念を明らかにすることが、本研究の試みである。